

捨てられ悪役令嬢は偽物ヒロインを許さない



セオドア・ピアソン

ピアソン公爵家の令息で、
攻略対象者の一人。
ゲーム内では女嫌いという
設定だったが——？



デリア

乙女ゲームのヒロイン。
特待生として王立学園に入学し、
後に聖女として覚醒した。



リンダ・アメルン

アメルン侯爵家の令嬢で、
フェリシアの友人。
ゲームには登場しない存在だが——？

クライブ・ラントバ

ラントバ王国の第一王子で、
攻略対象者の一人。
婚約者との死別という
悲しい過去を経て、
フェリシアと婚約に至った。

テッド・バッハム

バッハム子爵家の三男で、
攻略対象者の一人。
デリアとは身分を超えた幼馴染で、
入学前から親しい関係だった。

フェリシア・ハウエルズ

ハウエルズ公爵家の令嬢。
王太子の婚約者選定の日に
前世の記憶を思い出した。
自身が断罪される悪役令嬢だと
自覚してからは、
クライブを好きにならないように
気をつけている。



プロローグ

休日の朝。彩香^{あやか}は大事な話があると、婚約者の真二^{しんじ}に喫茶店に呼び出された。

到着したそこには幼なじみの佳奈^{かな}がいて、これまでの経験から嫌な予感がしていたが、それは見事に的中した。

「佳奈を好きになった。別れてくれ」

頭を下げる真二の横で、佳奈が「ごめんさい、彩香……ごめんねえ」と、泣きじやくりはじめた。そんな佳奈の肩を抱きながら、つい先ほどまで婚約者だと信じていた真二が、目の前に座る彩香を睨みつけてきた。

「佳奈を先に好きになったのはオレだ。責めるなら、オレを責めればいいだろう」

喫茶店にいるスタッフや客たちが、修羅場^{しゅらば}な雰囲気^{ふんいき}のテーブルに視線を集める。

ちなみに彩香はショックからか、まだ一つも言葉を発してはいなかった。

タレ目気味の大きな目。艶^{つや}やかな黒髪、白い肌。可愛くて、可憐^{かれん}で、庇護^{ひご}欲^{よく}を掻^かき立てられる女性。それが佳奈だ。

対して彩香は、両親は美形なのにそのどちらにも似ず、誰に似たのかと親にも呆^{あは}れられるほどに

不細工で、目は小さく、鼻も低い。佳奈と比べて身体も顔も大きく、何事にもおどおどする彩香の背中はいつも丸まっていた。

取り柄といえば、真面目なことだけ。

それが一番大切なことじゃないか。

婚約者だと信じていた男がそう言ってくれたのは、いつだっけ。

(……こうなることがわかっていれば、はじめから好きになんてならなかったのに)

白い天井を仰ぎ、彩香は必死に涙を堪えた。



「——そっか。わたし、日本人だったんだ」

唐突な台詞に、フェリシアの髪を梳かしていた侍女のグレンダが、頭に疑問符を浮かべていた。

フェリシアは後ろを振り向き、なんでもないわ、と慌てて笑った。

ここはラントバ王国の王都にある、ハウエルズ公爵家の別邸。二階の一室。

大きな鏡の前に座っているのは、ハウエルズ公爵家の長女、フェリシア・ハウエルズ。十二歳。

物心がつくようになった頃からだろうか。今いる世界とは別の世界と思われる不思議な記憶が入り交じるようになり、混乱することが多々あった。

これはなんだろう、誰の記憶なのだろうと探り、飛び飛びの記憶を統合していく日々。

それが、今日。

パズルのピースが全てピタツとはまったように、記憶が溢れるように蘇ってきた。

(……彩香。うん、そんな名前だった。だんだん思い出してきたわ。それにしても)

目の前の鏡に映る、文句のつけようもない美少女。

右手を頬に添えると、鏡の中の美少女も同じ動きをした。さらりと揺れる水色の髪まで美しく、

つい見惚れてしまう。

(……昔から自分の顔が好きだったのも、前世のコンプレックスのせいだったのね)

婚約者を幼なじみに寝取られてから男性不信になり、さらには人間不信となった彩香は、二次元

の世界に逃げた。

漫画やアニメを見ている時、ゲームをしている時だけは、心穏やかでいられた。

どうやって死んだのかはよく覚えていないが、生涯を独身で過ごしたのは間違いない。

(……? でも、この顔どこかで……それに、フェリシアという名も)

「——さま。フェリシアお嬢様っ」

グレンダの呼び声に、現実を引き戻されたフェリシアは、びくつとした。

「どうかされました? なにか気になることでも?」

「な、んでもないわ」

「そうですか? 今日は大事な日なので、しつかりしないとイケませんよ?」

「大事な日……?」

日本人だった記憶が一気に蘇ったせいか。現世の記憶が一瞬、曖昧あいまいになっていたフェリシアは首を傾げる。その様子に、グレンダが口をあんどりとした。

「う、嘘ですよね。あれだけ、王太子殿下と会えることを楽しみにしていらっしゃったのに……」

「王太子殿下……クライブ、殿下？ ラントバ王国の？」

「そうですよ。というか、どうして疑問形なのですか？」

グレンダに肩を掴まれ前後に揺すられながら、フェリシアは鏡の中の自分をじっくり観察してみた。

水色の髪、瞳。

記憶にあるものより少し幼いが、どこかで見た覚えのある、奇跡のように美しい容姿。

彩香だった時、数多ある女性キャラの中で、とあるキャラクターの顔が圧倒的に好きだった。

こんな顔だったら良かったのに。そんな風に願いながら毎日のようにキャラデザを眺めるぐらい、思い入れがあるキャラがいたのだ。

（途中で止めてしまったし、一度プレイしただけだから内容はあまり詳しく覚えてないけど、鏡の中の美少女——わたしは、異世界を舞台にした乙女おとめゲームのあのキャラだ）

動揺から拳を握ると、手の中にあつた紙がくしゃつと音を立てた。

あ。小さく声を出したフェリシアは、くしゃくしゃにしてしまった紙の端を丁寧に広げた。

それは、ラントバ王国の第一王子。クライブ・ラントバの絵姿だった。

クライブの婚約者候補に選ばれた日に、父親であるハウエルズ公爵からもらったものだ。

フェリシアはこの絵姿をはじめ見た時、クライブに一目惚れをした。

それからは、クライブに会える日を指折り数えて待っていた。

その絵姿を、穴があくほど見つめる。

（……やつぱり、見覚えがある）

ごくつと唾を呑み込む。

これは夢なのだろうか。フェリシアの容姿に憧れた、彩香が見ている夢。

それにしても、フェリシアとして過ごした時間があまりに長すぎるような気がした。

それに、夢の中でさらに夢を見た。それも、もう何度も。

（この状況……創作でよく見た、転生……生まれ変わり……前世の記憶……？）

——いや、まさか。

でも。

「フェリシアお嬢様、髪を結んでも？ もうあまり時間がありませんよ！」

「……ええ」

急かされるまま、姿勢を正す。

日本人だった時の思い出が——彩香としての記憶がはっきりしても、現世の思い出や記憶が消えたわけではない。

まだ混乱はしていたが、頭の中で、一旦情報を整理することにした。

今日は、ラントバ王国の第一王子であるクライブの婚約者候補が、王宮に集まる日。

癒れば王族の血を引くような高位貴族の、年頃の令嬢が招待されている。

(ええと。主人公であるヒロインには攻略対象者が複数人いて、クライブ殿下は、その一人だったはず)

うんうんと心の中で唸り、必死に記憶を探る。

ヒロインは平民だが、癒やしの力をもっており、後に聖女となる。

この世界に、魔法は存在しない。だからこそ、その力は奇跡とされ、聖女は神に等しい存在とされている。

だが、彩香はそのヒロインをあまり好きになれなかった。

癒やしの力が発現し、その力を操れるようになるまでは、はつきりいつて守られるだけしか脳のないヒロインだったのに、何故か複数のイケメンに囲まれ、愛されていた。

そこがどうしても引つかかり、なかなかストーリーを進めることができなかったのだ。

(……こんなことなら、最後までやればよかった)

『——この悪女め!』

突如、脳内に響いた声。それは、クライブのもの。

大好きだった声優さんが担当していたこともあって、それは耳に焼き付いていた。

そしてその台詞のおかげで、思い出したことがあった。

「そうだ……フェリシアは」

(フェリシアは、クライブ殿下の婚約者で。ヒロインを虐める悪役令嬢……)

「フェリシアお嬢様? なにか?」

「……え?」

「ぼーっとして、本当にどうされたのです? ご気分が優れないのですか?」

グレンダの心配する声に、フェリシアはいけないと気を引き締めた。

「大丈夫。少し、緊張してきただけ」

「そうですか。ずっと、クライブ殿下にお会いしたいと願っていましたものね」

「そう、ね」

クライブは王太子でありながら、みなが見惚れるほどの容姿の持ち主。

さらにその声は、思わずうっとりするほど透き通っている。

(……あの声優さんが担当しているから、それは当たり前なんだけど——いや違う。今はそんなことより)

これが夢ではなく、現実なのだとしたら。

そしてここが、彩香が知る乙女ゲームの世界なのだとしたら。

(……わたしは、フェリシアは最後、どうなるんだろう。クライブ殿下に婚約破棄されたところまではプレイしたけど)

フェリシアという婚約者がいながら、ヒロインばかり気にかけ、寄り添っていたクライブ。

確かに虐めはよくないが、クライブにも問題はあったんじゃないか。そんな思いが強くなり、そこでゲームを止めてしまったのだ。

(どうなるにせよ、婚約破棄はされる運命……か)

——こうなることがわかっていれば、はじめから好きにならなかつたのに。

彩香だつた時の思いが、ふと蘇つた。

フェリシアは、クライブを愛していた。

だからこそ、クライブに大切にされているヒロインが憎かつたのだろう。

好きだからこそ、好きだから故に——それは彩香にも覚えのある感情。

だからだろうか。はじめて見た時からキャラデザがお気に入りだつたことも重なり、彩香はヒロ

インより、フェリシアの方に感情移入した。

それもあつて、クライブの婚約破棄の宣言がどうしても許せなかつた。

(どんなに頑張つても、嫌われるなら)

それがわかつているなら。

「……いつそ、婚約者選ばなければいい」

ぼそつと呟く。

それは、後ろにいるグレンダには聞こえていなかったようだ。満足そうに「はい、終わりました

よ」と、笑つていたから。

「ありがとう、グレンダ。わたし、頑張つてくるわね」

「はい！ クライブ殿下のお心、がっちり掴んできてください！」

フェリシアはにつこり笑うだけで、それにはなにも答えなかつた。



王宮の広間には、婚約者候補の令嬢たちが集まつていた。みなはそわそわと頬を染めていたが、フェリシアだけは冷めた表情をしていた。

(どうせ、ヒロインと出会うまでの関係。婚約破棄される運命なのに……)

窓に映る自身の姿を見る。こんなに綺麗で、きつと王妃教育だつてたくさん頑張つてきたはずな

のに、待つていたのは、悲惨な未来。

ヒロインの引き立て役の、悪役令嬢。

過つたのは、彩香だつた頃の嫌な記憶。

それまで年賀状など一度も送つてこなかつた佳奈が、結婚してから毎年、写真付きの年賀状を送ってくるようになった。その頃には実家を出て一人暮らしをしていたが、もちろん佳奈に住所などは教えていなかつたので、わざわざ彩香の親に聞いて送り付けてきたのだろう。

家族写真付きの年賀状を。

最初に送られてきた時、彩香は佳奈に返信をしなかった。

でも、すかさず佳奈が彩香の両親に「あたし、嫌われているのかな」と告げ口をしたせいで、親から罵倒された彩香は、次の年からは嫌々、年賀状を送らざるを得なくなつた。

『あんたがそんなんだから、真二さんに捨てられたんじゃないの？』

家を出て、はじめてかかつてきた電話口で吐き捨てられた母親の言葉は、当時の彩香の精神を深く抉った。

(……夢なのか生まれ変わりなのかわからないけど、神様も嫌味だなあ。よりにもよって、婚約破棄される悪役令嬢なんて。わたしが憧れたのはフェリシアの容姿であって、境遇じゃないのに)

悔めさを重ねていると、広間へと続く階段の一番上に、第一王子が姿を現した。

ドキッ。

情けないことに、鼓動が跳ねた。

内容はともかく、絵だけはとても好きで、フェリシア以外の登場人物もみんな好みど真ん中だった乙女ゲーム。そのキャラが現実にも、目の前に現れたのだから、仕方がない。

(絵を現実の人物にすると、こんな感じになるのね。なんて綺麗……)

『幼なじみを泣かせるなんて、最低だな』

かつて愛した男の冷徹な声が脳内に響いたおかげで、うつかり見惚れそうになっていたフェリシアは、すぐに我に返ることができた。

「本日はお集まりいただき、ありがとうございます」

中性的な音を含んだ、澄んだ声色が耳に届いた。感激しそうになるのを、慌てておさえる。

待ち焦がれた第一王子の登場に、令嬢たちが沸き立つ。

広間に降りてきたクライブはすぐに取り囲まれ、その姿は見えなくなってしまう。

(今更だけど、はじめからフェリシアが婚約者だったわけじゃないんだ)

ゲームは、ヒロインが王立学園に入学するところからはじまっていた。

だから、その前の物語をフェリシアは知らない。語られていないのだ。

「……あ、う……」

密集地帯から離れていたフェリシアの少し前に、小さく呻く令嬢がいた。

クライブがいるであろう場所を、左右に揺れながら見ている。クライブがいるところに行きたいでも行けない。そんな心が見て取れて、素直だなあと、フェリシアは頬を緩ませた。

いつの間にかこちらを振り返っていたのか。フェリシアが笑っていたことに気付いたように、令嬢が、かあつと顔を赤くさせた。

フェリシアの心は一気に冷え、すぐに謝罪した。

「ごめんなさい。決して馬鹿にしたわけではないんです。あなたが、その、可愛くて」

令嬢は目をぱちくりとさせてから、哀しそうに苦笑いをした。

「……気を使わなくていいです。この場には綺麗な人たちがばかりなのに、私はブスで、社交性もなくて……よく考えたら、こんな私なんか、クライブ殿下が相手してくれるわけですね。馬鹿みたい」

それから令嬢は、フェリシアを羨ましそうに見つめてきた。

「いいなあ、あなたは。とつても綺麗で。クライブ殿下に相応しいのは、きっとあなたみたいな人ですよね」

「……なもの」

「え？」

「そんなもの、中身が伴ってないと、なにも意味がないわ」

くしゃつと顔を歪めたフェリシアに、令嬢が目を丸くする。

そこに。

「失礼。少し、いいかな」

令嬢たちの群れから出てきたクライブが、爽やかに笑いかけてきた。フェリシアと会話していた令嬢が、先ほどとは違う意味で顔を真っ赤にする。

「一人一人に、名前を訊ねているんだ。よければ、きみたちも教えてくれないかな」

柔らかな物腰と口調に、フェリシアは少し驚いていた。

対ヒロインは確かにこういう態度だったが、フェリシアには常に、邪魔者扱いの冷たい対応しかしていなかったイメージがあったからだ。はじめから嫌われていたわけではないのかと頭の隅で思いつながら、ちらつと隣を見れば、令嬢は緊張から固まっていた。

前世の記憶が蘇っていなければ、きっとわたしも似たような反応をしていたのだろうと考えながら、フェリシアは「はじめまして」と完璧なカーテシーをした。

「ハウエルズ公爵の娘、フェリシア・ハウエルズと申します」

「うん、はじめまして」

うつとりする笑顔も、やがて嫌われるとわかっていれば、冷静でいられる。

失礼のないように微笑み返してから、次はあなたの番よというように、フェリシアは隣の令嬢の背中に軽く触れた。

「わ、私は、リンダ・アメルンです！ アメルン侯爵の娘です！」

はつとしたように、声を震わせながらも、リンダは名乗った。

後方にいる数人の令嬢が馬鹿にするようにクスクスと笑っていたが、クライブは、包み込むような笑みを浮かべていた。

「はじめまして、リンダ嬢」

——ああ。入社した初日、緊張して声が裏返ってしまったわたしを馬鹿にせず、真二もこうして笑ってくれたっけ。

それでも最初で最後の彼氏は、結局、可愛い幼なじみを選んだ。

みんなが、佳奈を好きになった。両親でさえも。

真二だけは違うと思っていたけど、結果は同じだった。

目の前にいる王子様も、今がどれだけ優しかろうと、ヒロインに会えばその虜とりこになり、ヒロイン

を選ぶ。

（彩香だった時、真二のことを思い出すのはただただ辛くて、自分に足りないところがあつたんじゃないかと思うこともあつたけど……クライブ殿下と同じだと思えば、普通に最低な男だったと思えるな）

違う人生を歩んでいるからだろうか。

今、真二と佳奈に向かう感情は、自分でも不思議なことに、怒りのみだった。

佳奈はむろん、真二も、深く考えなくても酷い人間だったと思う。

あの優しかった真二はどこへやら。それとも、あれが本性だったのか。高給取りだったが、見た目は平凡だったので、佳奈のように可愛い子に言い寄られて、ころつと惚れてしまったのだろう。

（——可愛い子、か）

ピカピカに磨かれている窓。

眩しい太陽の光の中に、美少女が微かに映る。

（綺麗だけど、ヒロインに怒鳴る一枚絵のフェリシアの顔は、鬼みたいだったな）

まさに悪役。などと考えにふけるフェリシアに、どうされましたと、声をかける者がいた。

クライブとは違う男性の声。

立っていたのは、やはり見覚えのある、クライブにも決して引けを取らない美少年だった。

顔面の良さに、フェリシアが僅かに仰け反る。

（驚いた、けど。覚えのある顔だから、攻略対象の一人だよね……）

「窓が汚れていましたか？」

「い、いいえ。お天気がいいなど見ていただけです。お気遣い、ありがとうございます。ところで

あの、あなたは」

「これは失礼しました。私はクライブ殿下の側近の、イアン・キンケルと申します」

イアン。はつきりとした記憶はないが、確かにそんな名だった気がする。

腰を折ったさい、さらつと流れた銀の髪。クライブ殿下の金髪が太陽なら、イアンの髪は月だと、誰かが表現していた気がする。

ちなみにこのイアンにも、当然のようにフェリシアは忌み嫌われていた。こんな風に氣遣われることなど、ゲーム中では一度としてなかった。

（ヒロインに会う前は、二人と、こんな風に普通に会話ができていたんだ）

そう思うと、ますますヒロインが嫌いになった。

婚約者候補探しのパーティーは、つづがなく行われた。

クライブに好印象を残そうとアピールする令嬢たちがまわりから離れなかったため、フェリシアは意図せず、クライブと殆ど話さずにすんだ。

対し、話したくても話せない、他の令嬢たちに圧倒されたままのリンダと——リンダは落ち込んでいるが——仲良くなれたので、フェリシアは満足だった。

（万が一、これでわたしが婚約者選ばれたら……婚約破棄される運命まっしぐらね）
名前を名乗っただけで、なんのアピールもしない。

これで選ばれたら、集められた他の令嬢たちが納得しないだろう。

——が。

「でかしたぞ、フェリシア！ お前がクライブ殿下の婚約者で、未来の王妃だ！」

王宮からの書状を開封し、目を通すやいなや、フェリシアの父であるハウエルズ公爵は歓喜し、呆然と立ち尽くすフェリシアを抱き締めた。

「ふふ。フェリシアは誰より美しく、可愛いからなあ。選ばれると父は信じていたよ」

「ええ、ええ。わたくしもよ」

ハウエルズ公爵夫妻は、親馬鹿だった。

フェリシアは王太子の婚約者候補を集めたパーティーに出席するため、ハウエルズ領から馬車で何日も揺られて王都に來たのだが、二人は当然のように同行してくれた。ちなみに領主代理は、フェリシアより七つ年上の兄が務めている。

前世の記憶をはっきりと思い出す前のフェリシアは、一人で大丈夫ですよと何度も言ったが、両親も兄も、頑として譲らなかつた。

ゲーム内ではほぼ出番がなかつたので、顔も性格も知らなかつたが、フェリシアは彩香とは違い、少なくとも親には愛されていた。

——クライブに婚約破棄されたあとどうなるかは別にして、だが。

（……除籍じよせきされるのか、もろともに公爵家は没落ぼつらくするのか）

「今から王妃教育を受けるのは大変だけれど、フェリシアは優秀だから大丈夫よね」

ハウエルズ公爵夫人は嬉しそうに笑うが、フェリシアはそれどころではなかつた。

勉強は嫌いではない。

でも、無駄だとわかっている王妃教育に打ち込むことなど、できるだろうか。

（王立学園に入学するまで、約三年……）

普通なら、もつと幼い頃から受けるべきもの。それを、この年で——

（あれ？ そういえば、どうして王太子なのに、今まで婚約者がいながつたんだろう）

「！ まあ、大変！」

書状の全文を読み終えたハウエルズ公爵夫人が、急に声を張り上げた。

大変というわりに、口調はやけに嬉しそうだった。

「あなた。クライブ殿下が、わたくしたちに直接挨拶がしたいとのことですよ」

「おお、それはそれは。早速、返事を書かねば。善は急げというからな。クライブ殿下の都合が合えば、明日にでもお会いするでしょう」

「やはり、二人で来てよかつたですね。フェリシアをくれぐれもよろしくと、お伝えせねばなりませんもの」

盛り上がる両親。愛すべき家族。
婚約は嫌だなどと、言えるはずがなかった。

◇

「突然の申し出を受けてくださり、ありがとうございます。ハウエルズ公爵、ハウエルズ公爵夫人がフェリシア嬢と共に王都に来ていることを知り、早くご挨拶をしたいと思いますものですから」
次の日。

ハウエルズ公爵家の別邸にやって来たクライブに、ハウエルズ公爵は、いやいや、と朗らかに笑ってみせた。

「とてもありません、クライブ殿下。わざわざこちらに出向いてもらえたこと、そしてなにより、我が自慢の娘を婚約者に選んでいただいたこと、感謝しております」

「では、私とフェリシア嬢の婚約を認めてくださるのですか？」

「むろん。断る理由がどこにありません。娘も、クライブ殿下の婚約者候補として王宮へ招待された時から、ずっとそわそわしていたぐらいです」

「そう、なのですか？」

「ええ。パーティーでの娘はどうでしたか？ あまりに舞い上がって、なにか失礼でもしませんでしたか？ 娘は詳しく教えてくれなかったもので」

クライブがキョトンとする。

パーティーでのフェリシアと、ハウエルズ公爵が語るフェリシアが、どうにもちぐはぐなのだから、それも仕方のないことだった。

「――あの」

フェリシアはまずいと、意を決したように二人の会話に割って入った。

ハウエルズ公爵が、おお、と口角を上げる。

「そうだな。クライブ殿下と誰より話したいのは、お前だったな。すまない」

「いえ、その。クライブ殿下に、どうしても一つ、お聞きしたいことがあります」
クライブが、なにかな、と美しい金色の瞳を向けてきた。

奇跡のような顔面に負けじと、気合いを入れる。

「よろしければ、わたしを婚約者に選んでくださった理由を教えてください」
婚約者候補が集められたパーティーで、フェリシアはなにもしなかった。

アピールどころか、ろくに話すらしなかった。

なのに、なぜ。

悪役令嬢として、フェリシアという存在が必要だからか。

それが覆せない運命で、ゲームの筋書きを守るための強制力というものなのか。

どうしても、確認がしなかった。

「まあ、この子つたら。いけませんよ」

ハウエルズ公爵夫人はどう解釈したのか。照れたように、フェリシアをたしなめる。ハウエルズ公爵も、似たような表情をしている。

対してクライブは、戸惑っているようだった。

「クライブ殿下。少しの時間でよいので、二人でお話しできませんか？」

フェリシアの提案に、クライブはむしろほっとしたように「むろん、かまわないよ」と笑った。

「お父様、お母様。わたしのお部屋にクライブ殿下をお通ししてもよいですか？」

「ああ、いいとも」

「わたくしたちは、応接室で待っていますね」

ニコニコするハウエルズ公爵夫妻。

その姿に、ふと、なんともいえない気持ちに襲われた。

(自慢の娘、か……)

これまでフェリシアとして生きてきた年月の記憶のおかげで、二人の愛情は疑ってない。

でもそれは、この容姿があつてこそなんじゃないか。そんな考えが頭を過った。

彩香だった頃。

親によく、幼なじみの佳奈と比べられては、あんな可愛い子が欲しかった、あんたのせいで二人目を作る気がしないと嘆かれた。

大学まで行かせてくれたから、愛情がもしかしたら、ほんの一欠片ぐらいはあつたのではないかと期待したこともあつたが、客観的に考えられる今ならわかる。あの人たちは、単に世間体を気に

していただけだ。それとも、生んでしまった義務感からか。

どちらにせよ、我が子を愛する親なら『大学を卒業したらすぐに家を出て行け。連絡もしなくていいし、帰ってもくるな。必要ならこちらからする』とは言わないだろう。

佳奈と同じぐらい容姿が整っていたら、愛してくれていただろうか。そう考えたことは、数えきれないぐらいあつた。

「——フェリシア嬢？」

「あ、はい」

向かいに座るクライブに名を呼ばれたフェリシアは、前世の記憶に沈むばかりの思考を停止した。目の前のテーブルには、運ばれてきたばかりの紅茶と、数種類の茶菓子が並べられており、部屋に甘い匂いが広がる。

(……いずれ毛嫌いされる相手でも、こんなに顔面偏差値が高い人と二人きりだと、さすがに緊張する)

カップを手に持ち、一口、それを飲む。

ほうっと息を吐き、よし、と口火を切った。

「それでは、改めてお訊ねします。わたしは、どうして婚約者に選ばれたのでしょうか。あのパーティーで、クライブ殿下とはあまりお話しもできなかったですし」

「ああ、うん。そうだったね。すまない」

素直過ぎる謝罪の言葉に、選んでもらっておいてなかが不満なのか、と怒鳴られる覚悟もしてい

たフェリシアの調子が狂う。

「いえ、決して責めているわけでは……単に、不思議に思っただけです。わたしはクライブ殿下に、なんのアピールもできませんでしたから」

クライブは悩む素振りを見せてから、実はねと、口を開いた。

「父上が、きみをとても気に入っていて。私の婚約者には、フェリシア嬢がいいと。家柄も容姿も、教養も申し分ないからと」

掛け値なしの褒め言葉。彩香の時にはありえなかったもの。

どう反応していいかわからず「それは、とても、光栄、です」と、たどたどしい口調になってしまった。それをどう受け取ったのか。

「あくまで勧められただけで、それが理由の全てではないよ。集まってくれた令嬢の中から、私を選んでいいことにはなっていたんだ。だから、最終的にきみを婚約者にしたのは、私の意志だよ」

「お気遣いありがとうございます。ですが、陛下にそう言っていたただけで、わたしはもう充分ですから」

「いや、本当なんだ。リンダ嬢との会話、途中からだけど、聞こえていたよ。中身が伴ってないとなにも意味がないって言ってたよね。あれがとても、印象に残っていて」

「……はあ」

「それだけじゃない。実を言えばイアンに、きみがどんな人か、機会があれば探ってみてくれと頼

んでいたんだ——失礼かと、悩んだんだけど」

「あ、ああ。それで……」

パーティーに招待されていた令嬢の中には、イアンに自ら声をかける者も複数いた。クライブほどではないものの、イアンもパーティーでは令嬢たちの対応で忙しそうにしていた。

そんなイアンが、窓を見ていただけのフェリシアにどうして声をかけてきたのか疑問に思っていたが、そんな意図があったのかと、妙に納得した。

「横柄な態度をとることなく接してくれたと教えてくれた。確かにきみと話す時間はあまりとれなかったけど、少しはきみの人となりを知れたと思う。だから、きみに決めたんだ——気分を害しただろうか」

フェリシアは、いいえ、とにこっと笑った。

「正直に話してください、ありがとうございます。嬉しかったです」

クライブは「そうか、よかった」と、ほっとしたように頬を緩めた。

張り詰めた顔から一転、この表情。

果たして、これにときめかない令嬢がどれほどいるだろうか。

しかし。

『寄るな!』

ゲームの終盤。フェリシアが近付くだけで、鬼の形相をしていたクライブ。

その印象が強すぎて、こういった笑みを向けられることに違和感すら覚えてしまう。

(真二も、似たような笑みを向けてくれていた時期はあったな)

『悪いけど、二度とオレたちの前に姿を現さないでくれ』

そんな真二に告げられた、最後の言葉。

その表情には、嫌悪が入り混じっていたのを思い出した。

「私の婚約者になるということは、すなわち、王妃になるということだ。その覚悟はあるだろうか」

クライブが姿勢を正し、真剣に問うてくる。吸い込まれそうな瞳から目が逸らせない。それでも、頭の中はやけに冷静だった。

——王妃になる未来は、きつとこない。

だつてもう、登場人物が一致し過ぎている。顔も声も、名前も同じ。彩香の知る乙女ゲームのストーリー通りに進むとはまだ限らないのに、どうしてか、確信に近いものがあつた。

(……わたしが幸せになる未来なんて、想像できない)

きつとヒロインが現れれば、それまでたとえばどんなに優しくされていようとも、とたんに悪役にされ、嫌悪される。

王妃教育は、それまでの努力は、無駄になるだろう。

だからといって、覚悟なんてないと宣言できるはずもない。

ならば。と、フェリシアは無理やり思考を変えてみた。

(……たとえば貴族籍を剥奪はくたつされて平民になつても、語学力があれば仕事につけるかも。今は二カ国語しか習ってないけど、王妃となれば、もつと学ばなければならぬはず)

知識は絶対に裏切らないし、邪魔にならない。

彩香としての生涯を一人で生きていけたのは、間違いなく、手に職を持っていたから。

「——クライブ殿下」

彼の婚約者になること。婚約破棄されること。

ゲームの筋書きから逃れられない運命なら全てを受け入れ、その先を見据みえよう。

どうせわたしなど、愛してもらえないのだから。

わたしも、彼を愛さない。はじめから、好きにならない。

フェリシアは意識して、精一杯の笑みを浮かべてみせた。

「わたし。立派な王妃になれるよう、これから一生懸命頑張ります」



それまでも、屋敷には代わる代わる家庭教師が訪れ、フェリシアは貴族令嬢として必要な知識、礼節を学んでいた。けれど、未来の王妃ともなれば、学ぶ量や質はその比ではない。

クライブの婚約者となったフェリシアに、王宮での王妃教育がはじまった。

クライブも、未来の国王として忙しい日々を送っている。同じ王宮にいるとはいえ、そう顔を合
わすこともないだろう。

そう思っていたのだが――

「お疲れ、フェリシア」

一日に予定されていた王妃教育が終わる夕刻。

クライブはフェリシアの元を頻繁に訪れては、その頑張りを労ってくれていた。婚約者として最
低限の接触しかないものとはばかり予想していたフェリシアは、少し戸惑っていた。

(…婚約者として、仲を深めようとしてくれているのが伝わってくる)

顔も声も良くて、優しく、気遣いができて。なるほど。これではゲーム内のフェリシアがクラ
イブに執着し、異常なほど嫉妬していたわけも理解できるような気がした。

しかし。

だからこそ、残酷とも思えた。

「明日の王妃教育は、休みなんだってね」

フェリシアに与えられた王宮内にある一室でお茶をしていると、クライブが菓子をつまみながら
訊ねてきた。

「はい。王妃教育がはじまってから、はじめてのお休みです」

「そうだね。私も、明日は暇をもらったんだ。だから、一緒に街に出掛けないか？」

フェリシアのカップを持つ手が止まった。これは、所謂デートの誘いというものだろうか。

(…なんてね)

期待なんかしない。もしかしたら、なんて考えない。

デートはデートでも、愛し合っているからするものではない。

あくまで、未来のため。国のため。王侯貴族としての役目を果たすためのものだから。

『オレは見かけじゃなく、彩香という女性を、丸ごと好きになったんだ』

そんな風に言ってくれた真二だって。

『佳奈が可愛いからって、嫉妬して、泣かせて。最低だな』

汚物を見るような双眸で、そう吐き捨てた。

知っているよ。これから先、クライブも真二のようになるって。

だから、大丈夫。

「お誘い、嬉しいです。ぜひ」

フェリシアは心の内をおくびにも出さず、笑顔で答えた。

——三年後。

これまで一緒に別邸で暮らしていたハウエルズ公爵夫人は、つい昨日、本邸のあるハウエルズ領へと帰っていった。

元々、年に何度もハウエルズ領と王都を往復していた母に申し訳なく思っていたフェリシアが、なんとか説得したのだ。

もうわたしは、立派な淑女しやうぶです。王立学園に通う年齢にもなりましたし、別邸にはグレンダたちがいてくれますから、と。

正直、寂しかった。母のいなくなった屋敷は、なんだかがらんとしていて。なにより、怖かった。

王立学園に通う年齢になった。それはつまり、あの乙女ゲームのはじまりを意味する。

でも、だからこそ、クライブたちに嫌われていく姿を母に見せたくなかった。

(……ちゃんと愛してくれる親の存在が、こんなにも精神的な支えになっているなんて知らなかったな)

傍にいなくなって思い知った。

彩香の時は、こんな感覚、知らなかったから。

——そうして迎えた、王立学園の入学式の日。

今日のはじめて、ヒロインと対面することになる。

いっそ憎らしいほどに綺麗で、澄み渡った青空。

降り注ぐ、眩しい朝の光。

ハウエルズ公爵家の別邸まで、わざわざ迎えに来てくれたクライブ、イアンと共に馬車に揺られるフェリシアの鼓動が、徐々に早まっていく。

「フェリシア、もしかして緊張しているの？」

「私も気になっていました。いつもより少し、顔色が悪いような」

クライブとイアンが心配そうに声をかけてくる。

それはそうだろう。学園に向かうだけで、これほど緊張するなんて普通じゃない。

そう。普通、なら。

今日から、世界が変わる。

この日が来ることは覚悟していた。

今は優しいクライブとイアンも、これから少しずつヒロインに惹かれていき、それに比例するよ

うに、フェリシアを嫌悪していくことになる。

その未来を知っているから、どうしても怖くなってしまふ。

(……本当に、ゲーム通りになるのかな)

思わず胸中で呟いてしまった言葉を、フェリシアは否定するように小さく頭を左右にふった。

クライブとイアンは、生きている。決められた台詞や、決められた行動だけをする乙女ゲームのキャラなどではない。自分の意思が、心がある。それを、この三年間で実感した。

だから、ほんの少しの希望を抱くようになってしまっていた。

ヒロインなんて現れず、そもそもこの世界が乙女ゲームのものだなんて、妄想に過ぎなくて。日本人だった頃の記憶も、ただの夢で——なんて。

(都合がよすぎるわよね)

小さく嘲笑ちやうしやうしてから、フェリシアは顔を上げた。

「これから新しい生活が始まると思うと、クライブ殿下のおっしゃる通り、緊張してしまつて。

駄目ですね」

馬車が緩やかに止まったのは、そのタイミングで。

気付けばもう、王立学園の前だった。護衛騎士によつて扉が開かれ、イアンが最初に馬車をおりる。続いてクライブがおり、すつと手を差し出してきた。

「私たちがいるから大丈夫だよ」

フェリシアが苦笑する。その言葉が嘘だと今は言い切れないが、やがて目の前の二人は、フェリ

シアを目の敵かたみにする予定なのだから、複雑なことこの上ない。

「ありがとうございます。心強いです」

覚悟を決め、クライブの手を取る。

大丈夫。そのために、今日まで必死に勉学に励んできたのだからと気持ちを高め、フェリシアは足を動かした。

学園の敷地内に入る。とたんに、ざわつと空気が揺れた。

一人の美少女と、二人の美青年の姿を見つけた生徒たちが、頬を染める。

けれどそこは流石の貴族子息子女たちとでもいおうか。大きな声で騒ぐことはなく、遠目から、三人に熱い視線を注いでいる。

自身が美少女だと自覚はしているものの、前世の記憶が邪魔をし、フェリシアはなんともいえない居心地の悪さを感じてしまい、心臓がバクバクしていた。

「まあ、見て。あの子の制服だけ、みなと違って真っ黒よ」

そんな中。黄色い声に混じる女子生徒の会話に気付いたのは、フェリシアが今、もつとも知りた
い——いや、知りたくなかつた情報だったからだろうか。

「ああ、三年ぶりの特待生でしょ？」

「特待生？」

「特待生制度で入った、平民の生徒ってことよ。入学金、授業料が免除めんじゆされるけど、その枠は毎年一人なのね。だから、平民がこぞつて受けるらしいわ。すごーく優秀でないと、認められないみた

「ただけ」

「だから三年ぶり？　じゃあ、とても優秀なのね」

「でもね。周りが貴族ばかりだから、世界が違うことに耐えられず、辞める人も一定数いるらしいわよ」

「よく知っているわね」

「私のお父様、学園の教師ですもの」

フェリシアは知らず知らずのうちに足を止め、必死に令嬢たちの会話に意識を集中していた。クライブ、イアンが同じように足を止め、俯くフェリシアを不思議そうに見つめる。

令嬢たちの会話を他にも聞いている生徒がいたらしく「あの子、平民らしいぜ」「へえ。言われてみれば、歩き方に品がないかも」などの、揶揄する声がちらほら聞こえてきた。

王立学園の制服は白を基調としている。だが、特待生だけは黒の制服なのだ。

思い出した設定に、フェリシアの鼓動が早鐘を打ちはじめた。

(ヒロインは……ヒロインは、どこに)

顔を上げる。クライブたち以外に向けられている視線を辿る。辿る。

——いた。

こちらに背を向けているので、顔は見えない。

この国では珍しい艶やかな黒髪が風に揺れている。

黒髪のポブカットに、黒い制服。

それ以上のヒロインの情報が思い出せなくて、そこでようやく、ヒロインにはデフォルトの名前や声がなく、顔すらも描かれていなかったことを思い出した。

「……………」

ヒロインが。黒髪の女性が、自身に集まる視線に気付いたように、くるりと制服をひるがえし、こちらを振り返った。

その顔は。

見覚えがある、どころの話ではなかった。

「……佳奈？」

呟いた声は、驚くほど掠れていた。

身体が凍りついたように固まる。足が地面に張り付き、動けなくなる。

「……な、んで」

驚愕の声はフェリシアではなく、クライブのものだった。

クライブの金の瞳が、真っ直ぐに、ヒロイン——佳奈に注がれる。

そのままクライブは、佳奈に向かって走っていった。

なんなのだろう、これは。

どうしてヒロインの顔が、佳奈そっくりなのか。



あれは、佳奈自身？

それとも、ただ似ているだけ？

(また、佳奈に奪われる)

ヒロインに、なにもかも奪われる。その覚悟はしていた。

でも、よりによって佳奈に——なんて。

(あんまりよ、神様)

パニックになりそうなフェリシアは、とにかくこの場から逃げたくて仕方なかった。

「……イアン。わたしは先に行くと、クライブ殿下にお伝えください」

ゆっくりイアンを振り返る。

そんなイアンの視線もまた、佳奈に注がれていた。

「——リサ様……？」

イアンは目を見開きながら、ある女性の名を口にした。

フェリシアはその反応から、とあることを思い出した。

クライブとイアンが、ヒロインに、ともすれば一目惚れに近いかたちで惹かれた理由を。

(リサ様……クライブ殿下の、一人目の婚約者。そしてクライブ殿下とイアンの、想い人)

リサ、という女性は。国王が決めたクライブの婚約者だったが、クライブが十歳の時に亡くなっている。

八歳で発症した病が原因で、大人にはなれないと医師に告げられていたそう。

(陛下はその時点で、別の婚約者をと説得したけれど、クライブ殿下は受け入れなかった……きっと、リサ様を深く愛していたから)

それは、フェリシアがクライブの婚約者に選ばれてから少し経って、父親のハウエルズ公爵から教えてもらったことだ。

どうして今までクライブ殿下に婚約者がいなかったのか、フェリシアがそう訊ねたことがきっかけだった。

ハウエルズ公爵はそれを語ることを、最初は渋っていた。

クライブ殿下を愛するお前にとって、気分の良い話ではないからと。それでも、クライブ殿下の全てを知った上でお支えしたいと訴え、聞き出すことができた真実。

その上、クライブの実母である王妃は、リサが病死する一年前に、不慮ふりよの事故で亡くなっている。立て続けに大切な人を失ってしまったクライブ。その傷が癒えるのに、二年という歳月がかかってしまったのだらう。いや、本当は癒えていないのかもしれない。

それでも第一王子としての責任から、クライブは新しい婚約者を探すほかなかったのだ。

どうしてリサのことを教えてもらった時に思い出さなかったのか。リサとヒロインの顔が、瓜二つだということを。

だからこそ、クライブとイアンは出会ったばかりのヒロインに惹かれたというのに。

(……そう。イアンも、リサ様を密かに想っていた。叶わぬ恋と諦めながら)

リサに似ているから二人は優しくしてくれていたのか。そうヒロインが思い悩み、涙するエピソードがあったはず。

ソードがあったはず。

(でも、どうして佳奈なの……?)

駄目だ。もう、ぐちゃぐちゃだ。

よりによってヒロインが。クライブやイアンから愛されるヒロインが、誰より嫌いな幼なじみの顔をしているなんて、絶望でしかなかった。

またあの日々が繰り返される。

好きな人が佳奈に奪われていくのを、ただ見ているだけの人生。

(……そうだ。彩香の時も、わたしが悪いって親によく非難されてたっけ。なんだ。わたし、今世でも役回りは一緒なんだわ)

諦めたような乾いた笑いが一つ、漏れ出た。

「——フェリシア？」

ふいに響いた、救いのような女性の声に振り向く。

そこには、懐かしい顔があった。

「リンド……」

クライブの婚約者候補が集められたパーティーで仲良くなった、あのリンドだ。

リンドは王都ではなく地方に住んでいたため、あれから手紙のやり取りはしていたが、こうして顔を合わせるのパーティー以来だった。

「嬉しい、やっと見つけたわ。王都には他に知り合いもないし、あなたに会えるのを楽しみにし

ていたのよ」

駆け寄ってきてくれるリンダに、フェリシアは涙を滲ませた。

「……わたしもよ、リンダ」

「やだ、泣かないでよ。つられちゃうじゃない」

笑い合い、気持ちが悪く着いたフェリシアはもう一度、イアンの名前を呼んだ。先ほどよりも、大きな声で。イアンがはっとしたように、フェリシアに視線を向けた。

「リンダと二人で、先に入學式が行われる講堂に向かいます。クライブ殿下には、そう伝えてください」

「し、しかし」

フェリシアとクライブ。交互に視線を移すイアンに、フェリシアは綺麗に微笑んでみせた。

「クライブ殿下はお優しいから、好奇の目にさらされているあの女子生徒を放ってはおけない。そうでしょう？」

「……そう、ですね」

「次期国王として、とてもご立派だと思います。講堂までクライブ殿下と一緒にいてあげられたなら、あの方も心強いでしょう。わたしには久しぶりに会えた友がいるので、安心してください。緊張も、どこかに吹き飛びましたから」

それでも迷う素振りを見せるイアンに、ではまた後でと言いつつ、リンダの腕を取り歩き出した。

イアンが後ろで名前を呼んだが、気付かないふりをした。

「ねえ、待って。もしかして、クライブ殿下と一緒に来たの？ なら」

「大丈夫よ。クライブ殿下なら、ほら。あそこにいるから」

すつと指差すフェリシア。それを辿るリンダの視線の先には、黒髪の女性を庇うように前に立つ、クライブの姿があった。

この学園の生徒である以上、みなが仲間だ。違うかと、まわりの人たちを説得している。

「あの子誰なの？ 婚約者のあなたを放って、クライブ殿下はなにを」

「放っているわけじゃないわ。困っている生徒を助けているだけよ」

立ち止まりそうになるリンダの腕を軽く引っ張りながら、フェリシアが前を向いたまま答える。「……なら、どうしてあなたはそんなに苦しそうなの？」

びたっ。

フェリシアの足が止まる。

数秒の沈黙が流れたのち、フェリシアは「気のせいよ」と言った。

「ねえ、フェリシア。こっちを向いて。私の目を見て」

「……嫌」

リンダは、もう、と息を吐いた。

「どこか人気がないところを探すわよ」

そう言いつつ、今度はリンダがフェリシアの腕を引いた。

「……式がはじまってしまいわ」

「平気。でも、咎められるときは一緒よ?」

フェリシアは前を歩くリンダの背中を見ながら、心がじんわり温かくなるのを感じた。

生徒も教師も、入学式が行われる講堂に向かう中、人気のないところを探すのに、そう時間はかからなかった。校舎裏に辿り着いた二人は、きよるきよるとあたりを見回し、誰もいないことを確認すると、目を合わせた。

「ここならいいんじゃない?」

「そう、ね。でも、やっぱり入学式を欠席するのは。あなたがわたしのせいで叱られるのは嫌だし」

「いいんだってば。だってあなたは、はじめてできた私の大切なお友達なんだから」

「……それはわたしも同じよ、リンダ」

彩香には、悩みを打ち明けられる人どころか、友だちすらろくにいなかった。だから友と呼んでくれる存在がいること。それだけでもう、フェリシアは胸がいつぱいだった。

「ほら、話せる範囲でいいから。話してみて?」

優しい口調。ゲーム内には登場しなかったリンダの存在は、フェリシアをひどく安心させた。

全部は話せない。でも、せめて一欠片だけでもいい。

話を、抱える気持ちを、誰かに打ち明けてしまいたかった。

「……そんなに大層なことじゃないの。クライブ殿下が庇っていたあの生徒が、クライブ殿下が愛していた人にそっくりで、驚いてしまっただけ」

「クライブ殿下が愛していた人?」

「そう。五年前に病で亡くなってしまった、クライブ殿下の一人目の婚約者様よ。クライブ殿下は、その方をとても愛していた。政略的に仕方なく婚約したわたしと違ってね」

苦笑するフェリシアに、リンダは困った顔をした。

「……クライブ殿下にそう言われたの?」

「直接は言われてないけど、少なくともわたしは婚約者選ばれたのは、陛下の口添えがあったからよ」

どう答えたものかと、リンダは下を向いてしまった。

意地の悪い言い方をしてしまったと、フェリシアはわざと、明るい口調に切り替えた。

「変なことを言っでごめんなさい。それより、リンダはどうなの? 年上の婚約者との仲良しぶり、よく手紙で惚気られていたけど」

「は、話を変えない! そもそも、クライブ殿下があなたを愛してないってどうして思うの? はじめは国のために、だったかもしれないけど、気持ちは変わるわ。前の婚約者だった方が亡くなられて、もう五年が経つのでしょうか? なら」

「みんなとね、同じなのよ。わたしに対する接し方が。クライブ殿下が恋をしたら、独占欲とか凄いいんだから」

「意外……でもそれ、誰から聞いたの?」

ゲーム内ではそうだった、とは言えず。フェリシアは、ええと、と慌てた。

「い、いろんな人から」

「……まさかクライブ殿下からじゃ」

「ち、違いわ。クライブ殿下がわたしの前でリサ様の名前を出したことは、これまで一度もないもの」

「なら、どうしてあなたはリサ様の顔まで知っていたの？」

「やんわりと問うリンダは、思いの外鋭かった。」

「……肖像画が目にする機会があつて」

目を伏せるフェリシアをどう解釈したのか。リンダは、そうなの、と呟いた。

「でも結局のところ顔が似ているだけ、よね？ なにがそんなに不安なの？」

不安ではなく、ただ、なにもかも奪っていくヒロインの顔が、佳奈と酷似していることが辛かった。でも、それを伝えたところで信じてはもらえないだろう。

「……彼女に駆け寄るクライブ殿下の表情、とても必死だった。わたしやみんなと接する時とは、まるで違っていた。だからきつと彼女は、あの方にとつて特別な存在になるわ」

「待つてよ。あの子、確か黒の制服を着ていたわよね。なら彼女は、平民なんじゃないの？」

「よく知っているわね」

「これから通う王立学園がどんなところか、私なりに調べたから……じゃなくて。第一王子と平民が一緒になるなんてありえない。許されないわ。なのに、どうしてそこまで」

後に聖女となるから、それも可能になるなんて、言えるはずもなく。

「心は別でしょ？ 愛し合うことはできるし、止められないわ」

「そうかもしれないけど……」

「そうなつたら、わたしは二人を邪魔する悪女ね」

「……あなたのどことが悪女よ」

「そう思う？ 嬉しい。なんだか、あなたに吐き出せてすっきりしたわ」

愛されることはないとわかつていたのに、情けなくも取り乱し、涙が零れそうになった。

（でも、仕方がなかった。だってヒロインの顔が、よりもよつて大嫌いな佳奈に酷似していたんだもの）

あれは完全に想定外だった。中身も佳奈だったらと考えるだけで身体がぶると震えたけど、確かめる勇氣もないし、近付きたくもなかった。

（なんにしても、予定はなにも変わらないわ）

彩香の記憶にあるヒロインの姿と同じ髪色、髪型をした、ヒロインと同じ立場である特待生が、ゲームの設定通りクライブの前の婚約者とそっくりだった。

それは、クライブの動揺ぶりと、イアンが呟いた名前から明らかとなった。

これからの未来がゲームのストーリー通りに進む可能性は、格段に上がった。

そうなれば、たとえヒロインが誰を選ぼうとも、きつとクライブには婚約破棄されてしまう。どうなるにせよ、フェリシアは表舞台から姿を消すことになるのだ。

「——その二人」

艶のある、聞き覚えのある声色。風に混じって、それがごく近くから響いた。

「入学式はもうはじまっているぞ。そこでなにをしている」

肩あたりまで伸びた紫色の髪が、ふわっと風になびく。

絵画のように美しい切れ長の目に、圧が加わる。

(……三人目、だ)

鋭い美しさを持つ、ヒロインの先輩。

攻略対象者のうちの一人。

クライブ、イアン。類まれなる美貌を持つ二人に並ぶ美青年。

圧倒されたように、リンダがぼやっと固まる。

「……王都って、すごい」

吐露された想いに、彼らは特別だからとフェリシアは心で叫びつつ、頭を下げた。

「申し訳ありません。話があると、わたしが無理に彼女を誘いました。彼女に咎はありません。お

叱りは、どうかわたしだけにしてください」

「ちょ、ちよっとフェリシア！」

男は「フェリシア？」と眉をひそめた。

「クライブ殿下の婚約者の、フェリシア嬢か……」

フェリシアが第一王子の婚約者だと、国中に周知されているわけではない。知っているのは、王宮で開かれた婚約パーティーに招待されるほどの、高位貴族が主だ。

つまり彼は、高位貴族の子息ということになる。

(顔が国宝級なのはクライブ殿下とイアンのおかげでもう慣れたし、この人もどうせ、ヒロインを——佳奈を好きになると思えば、なにも怖くないな)

臆することなく視線を交差させるフェリシアに、男はふうっと息を吐いた。

「失礼。私はピアソン公爵が子息、セオドアだ」

ゲーム内のフェリシアは、セオドアとの接点は殆どなかった。

しかし他の攻略対象者と同じく、当然のようにそれはそれは憎まれ、嫌われていた。

(ヒロインだけに優しい、クールな先輩。セオドア・ピアソン……)

この綺麗な顔に本気で睨まれたら、さぞ怖からう。

恐ろしいが、その日は確実に来るのだ。

「未来の王妃がサボりとは。あまり感心はしないな」

「はい、その通りです。先生方に言っていただけで、もちろんかまいませんので」

「開き直ったつもりか？ それとも、クライブ殿下の婚約者だから甘く見てもらえるんですか？」

「……そんな愚かな婚約者なら、とっくに婚約を破棄されていますよ」

薄く笑うフェリシアに、リンダがなにか言いたげな双眸を向ける。

その様子になにか感じ取ったのか。

「……今日の私は、新人生を案内する係だ。わざわざ教師に告げ口するような面倒なことはい

——では、行くぞ」

立ち読みサンプルはここまで

「どこに……」

「入学式が行われている講堂だ。きみたちはその場所がわからず、迷っていた。そうだな？」
フェリシアとリンダは一瞬ぼかんとしたが、顔を見合わせて頷き合った。

それから息を合わせ「そうです」と、セオドアに向き直って声を重ねた。

「よろしい。来なさい」

背を向け、歩き出すセオドア。

こんな一面があつたのかと驚きながら、フェリシアはリンダと一緒に、凛と伸びた背中を追いかけた。

講堂の扉が開かれ、フェリシアはリンダと並んで中に入る。

壇上では、新人生代表としてクライブが挨拶をしているところだった。

「では、私はこれで失礼する」

近くにいる教師に事情を説明し終えたセオドアが小声で囁き、講堂を後にしようとする。

フェリシアとリンダが改めて礼を述べると、セオドアは、もういいと軽く手を上げ去っていった。

「綺麗で怖そうな人だったけど、悪い人ではなかったね」

耳元ではしゃぐリンダに「うん。むしろ、思っていたよりずっと優しかった」と、フェリシアは同意した。

次に会う時はこうはいかないだろうなあと、遠い目をしながら壇上に目を向けた。
ばちっ。

壇上にいるクライブと視線が合った気がして、フェリシアは思わず、顔を背けてしまった。

（目が合った？ いや、別に合ってもおかしくはないんだけど）

挨拶が終わり、拍手の中、壇上からクライブが降りてくる。席に戻るのかと思いきや、クライブは講堂の後方に立つフェリシアの方へ向かってきた。

（……？ あ……っ）

近くにヒロインがいるのか。フェリシアが瞬時に顔を青くし、きよろきよろとあたりを窺う。そうこうしている内に、クライブが目の前にやってきた。

「どこに行っていたんだ？」

「わたしですか？」

「きみの他に誰がいる」

フェリシアは思わず、ここにいるじゃないですかというようにリンダの肩を抱き、引き寄せた。
リンダが「……なにやってるの？」と、呆れた顔をする。

「え？ だっつて」

見る限り、ヒロインはいない。

フェリシアはそうとは見えずとも、内心では軽く混乱していた。

いつも穏やかなクライブが、焦ったように見えたから。

自分のために、こんな表情をするとは思えなかったから。

「イアンから、きみが先に講堂に向かったと聞いていたのに姿がないから……私は挨拶があつて、